

事務局会議議事録

2023年12月14日(木) 17:00~18:30 於市民活動センター会議室1

出席者 平澤 菊田 大橋 石嶋 各務 鈴井 中村

内容

① ホタル部会の今後について

12月8日に来年度以降のホタル部会についての話し合いがあった。(杉浦、西郷、手塚、鈴井、平澤、大橋が出席)

決まったこと 2024年度、成虫を入手。交尾、産卵、孵化、幼虫飼育。2025年度に蛹化、羽化を経て、ホタルを飛ばすことを最終目標とする。井戸水の水質の適否を再検証(※)するため、上水道(水道水)と井戸水の両方を使って飼育する(※西郷さんは自宅の水道水で羽化に成功し、井戸水の水質に問題があると7年前に判断している)。ホタル部会の年間予算は現在45,000円。来年度どうするかは今後話し合うこととする。

② 2023年度の執行部の役割分担

今年5月に大橋さんに作成していただいた役割分担表を基に確認とその他変更点、来年度に向けて検討すべき事項などを話し合った。

○事務局会議 ○例会 ○部会活動報告(月間) ○ホームページ運用管理 ○Facebook・Instagram運用管理 ○youがおネット ○新規入会申込者対応 ○ホームページお問合せ対応 ○広報紙、外部団体との対応

検討すべきこと、決まったこと

・例会は「会員相互交流の場としてイベント的に実施」という大きな目的がある。今年度は15周年記念イベントを開催したが、来年度はどのようにするか検討する。

・部会活動報告(月間)は今後、ホームページ上の会員専用コーナーに掲載する。なお、各部会の活動報告(トピック含む)は、活動の都度、ホームページ(トップページ)に記事投稿する。

・Instagramは10月に始めたが、動画の再生回数が4万回を超えるものがあったり、Instagramを見てホームページ問合せをした方もいたり、と反響がある。現在は投稿できるのは各務、中村のみ。比較的簡単に投稿できるので、投稿したい方は会長、事務局にご連絡をお願いします。

③ 市民活動センターが愛称を募集(12/21~1/23)

④ 生涯学習情報センター 市内の市民活動団体の小冊子を作成予定。原稿締め切りは1/18

⑤ イベントのお知らせ「とちぎ地域・森づくりフォーラム」2024/1/31(水) 13:30~16:00 栃木県庁研修館 本会の特別顧問の大久保達弘先生(宇都宮大学農学部森林科学科教授)の講演会、事例紹介(モリ田守)、パネルディスカッションが予定されている。申し込みが必要。

電話028-624-3710 メール tochi-green@t-kms.sakura.ne.jp

⑥ 朝日新聞(2023年8月30日)の記事に「外来種駆除 命の大切さ どう伝える」というものがあった(添付したもの)。子どもに(特に小学校低学年)駆除についてどのように伝えるのか、大人はどう向き合うべきか、など難しい問題があり、答は出ないが、考えていくべきことと皆で話した。(文責 中村 節子)

外来種駆除 命の大切さどう伝える

生物多様性を守るために外来種を駆除し、その命を奪うことがある。環境教育の重要性が広まるなか、大切な命を奪う行為を子どもにもどう伝えたらいいのか。

「本心としては外来生物の駆除作業に子どもを関わらせたくない」「防除よりも、子どもにはたくさんの生きものと触れ合う自然体験をしてほしい」

投稿が議論呼ぶ

今年4月、多摩川を中心に生き物観察ガイドをしている川井希美さん(39)のSNSでの投稿が議論を呼んだ。

「批判は覚悟していた」という川井さん。あえて一石を投じたのは、年100回以上の観察会をする中で、ショッキングな経験をしたからだ。

講師を務めるサイエンス塾の授業で、子どもたちにアメリカザリガニ(アメザリ)を見せた時、「このつらは殺してもよい」。こんな声が聞こえた。観察会では「駆逐してやる」とアメザリを踏みつぶす子どももいた。

アメザリはもともと日本にいなかった北米原産。本来の生態系を乱す侵略的外来種として、各地で駆除も行われている。こうした外来種の命を軽視するような言動は、小学校低学年くらいの手に見られたという。

「生き物の命に善悪はないのに、子どもにとっては外来種かそうでないかの短絡的な基準になってしまう。手軽な環境教育として駆除活動が行われるなかで、本来の環境保全でなく、駆除が目的になっているのではないかと指摘する。

川井さんは自身の観察会で、子どもには外来種・在来種の区別なく、まずは様々な生き物に親しみ、楽しんでほしいことを大事にしているという。

「駆除対象の生き物だとしても、決して殺して『よし』命があ

大人の向き合い方 配慮を／考える時間きちんと設けて

るわけではない」

自然破壊が深刻化する中、環境教育の重要性は増している。今年3月に政府が閣議決定した生物多様性の新たな「国家戦略」でも、環境教育の推進は行動目標に位置付けられた。

文科科学省の学習指導要領では、中学生の理科で「外来生物に触れること」と明記された。ただ、外来種についてどう教えるかは、学校現場に委ねている。

命の選別を危惧

日本環境教育フォーラム理事長の阿部治さん(環境教育学)は、子どもへの環境教育では、自然の持つ神秘さや不思議さに感動する感性(センス・オブ・ワンダー)をいかにして育むかが重要だという。

幼児期は自然への感性を養い、学齢期は環境や生き物と人の関わりへの理解など知識・技術の学習

に重点を置く。成人期は学んだことを自身の行動につなげることが望ましいという。

小さい子どもは発育の差もあり、外来種の駆除について理解することは難しいが、「大人がどう向き合っているかを子どもは見ている。生物多様性の保全のために大事だからこそ、大人は外来種と向き合う姿勢に気を配らなければならない」と阿部さんは話す。

子どものカウンセリングに長年取り組む、アール医療専門職大学の徳田克己教授(教育学)は「駆除という行為と『命は大切に』という正反対のメッセージの違いを、幼児や小学校低学年の子どもはおそらく理解できないだろう」と言う。

二つのメッセージを同時に与えると、子どもは混乱して、どちらかを信じるようになるという。

「外来種だから殺す」というメッセージは、とても具体的で、子どもには理解や行動化がしやすい」と指摘する。

徳田さんは命の選別につながることを危惧する。「怖いのは、ある特定の種は『殺してよい』『死んでも仕方がない』、それ以外は『殺してはいけない』という認識を幼児期に注入してしまうことだ」とする。

ただ、駆除活動との関わりは否定しない。むしろ、命の大切さを子どもに伝える機会となる可能性もある。「供養塔を作って駆除した生き物を思っ手をあわせるなど、命について考える時間をきちんと設けることが大切。駆除という結論だけを子どもに勧める雰囲気はとても乱暴です」(矢田文)

湿地でアメリカザリガニの駆除をする子どもたち



米余りが背景にあった。1985年には文部省(当時)が「週3回ほど米飯にする」と目標を立て、2009年にはこの目標を求めた。